九谷焼の芸術祭

KUTANism





秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

LIBRARY

「毛筆細字技法」で 日本の詩歌の世界を展開する

第六部

作家工房探訪の最終回。「毛筆細字技法」を用いて独自の美を表現する三代・田村敬星さんを訪問。焼き物の世界ではほとんど見かけない大変珍しい技術・毛筆細字技法がいかに生まれ、どのように受け継がれてきたのかをお聞きしました。

「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは =

長い歴史に育まれてきた九谷焼の「技」は、いかに生まれ、今後どのように変化していくのでしょうか?KUTANism総合監修・秋元雄史が自らその現場に足を運び、ナビゲーターと対話をするなかで、九谷焼を再発見していく連載シリーズ。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

WEB版はこちら /





#06

「毛筆細字技法」で日本の詩歌の世界を展開する

KUTANism全体監修・秋元雄史が自ら現場に足を運び、ナビゲーターと対談をするなかで九谷焼を再発見していく連載シリーズ「秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」。第4話から第6話は「技法の継承と個性」をテーマに、九谷焼を代表する技法と技の引き継がれ方に迫ります。今回伺ったのは、毛筆細字の技法を用いて独自の美を表現する三代・田村敬星さんです。

漢詩や和歌といった古典文学を極細の毛筆で磁器に描き込む技術「毛筆細字技法」。目を見張るほど精緻で美しく描かれた細字は、焼き物の世界ではほとんど見ない大変珍しい技術です。明治期から1世紀以上、四代にわたって一子相伝で受け継がれ、現在は三代・田村敬星さんと娘であり四代の星都さんによって守られています。 毛筆細字技法について、またこの技術がどのようにして生まれ、いかに受け継がれてきたのかをお聞きしました。

目次

- → 連綿と受け継がれてきた「毛筆細字技法」 九谷焼と文学の掛け算で奥深い世界を表現する。
- ~ 祖父に強く勧められ、19歳で九谷焼の世界に飛び込む
- → 一人でゴールを目指すのではなく、次の代へバトンをつなぐ
- ~ この回のまとめ



案内してくれた人 田村敬星さん

1949年石川県生まれ。高校卒業後、祖父であり二代・田村金星に師事し毛筆細字技法を学ぶ。1977年日本伝統工芸展、1979年日本陶芸展に入選するなど数々の展覧会で入選。1983年日本工芸会正会員認定。2005年石川県指定無形文化財九谷焼技術保存資格保持者に認定。毛筆細字の技法を用いて書や詩の美を追求し、九谷焼の可能性を広げている。

連綿と受け継がれてきた「毛筆細字技法」
九谷焼と文学の掛け算で奥深い世界を表現する。



田村敬星作「百人一首耳付扁壺」。ぎっしりと空間を埋め尽くすように細字が描かれている。

秋元: 田村さんの「九谷毛筆細字(さいじ)技法」は、高度な技術として評価を受けていらっしゃいますね。実物を見せていただくと、改めて凄さを感じます。

田村: 内側の細字はもちろん、外の絵付けも全て自分で行っています。歴代からずっとこのような細字の仕事をしてきたのですが、加飾は私の代になってから自分で行うようになりました。こちらは初代・小田清山(おだせいざん)の作品ですが、当時は外側の絵付けを金沢の職人さんにお願いして、初代は文字のみを描いていたと聞いています。





初代・小田清山の作品。当時は器の内側に細字を描くのが定番だった。

田村: こちらは花詰(※)という技法を使って絵付けを施しています。色合いが上品な作品です。初代の作品と比べると、私はどちらかというと幾何学的な模様やシャープな形状のものが多いかもしれません。

(※)花詰/菊や牡丹、小花などの花の文様で埋め尽くしていく技法のひとつで、明治期に誕生した。

秋元: ご自分の代になってからは全部お一人で仕事をしているということですが、素地は職人さんに依頼しているのでしょうか?

田村: 形をデザインして実寸サイズの立体的な見本を粘土で作るところまで自分で行い、そこから先は専属の素地師さんにお願いしています。私は若い頃から九谷の分業制というものに疑問がありまして、昔の職人さんたちは皆素晴らしい仕事をされていますが、分業をしている限り、陶芸家とは呼ばれるけれど作家にはなれないんですよね。やはり作品の全てにおいて自分の意志が反映されていなくてはならないんじゃないかと、そういうことを思うようになりました。形作りから全部自分でやろうと。一方で素地作りは指が硬くなってしまって絵付けに支障が出るということがありまして、せめて、その原型は自分で作ろうということでやっています。ですから私どもの仕事というのは、焼き物、色絵、書、そして古典文学、この4つを習得して初めて作品ができますので、一人前になるまでにどうしても時間がかかってしまうんです。



秋元: 作家として細字を仕事にしていったのは田村さんの代からですよね。改めて伺いたいのですが、細字技法はどのように生まれたのでしょうか?

田村: 細字技法は明治の初め頃、南加賀地方で生まれたと言われています。九谷焼は分業ですので素地を作るのは素地師、絵付けをするのは絵付け師と分かれていますが、さらに絵付けも、輪郭を専門で描く職人や色を塗る職人、金彩の職人など加飾方法によって仕事が分担されていました。細字は様々ある加飾方法の一つとして用いられていたんです。



田村: 初めの頃は漢詩文が主流で、例えば中国の漢詩「赤壁(せきへき)」や日本の漢詩人・石川丈山(いしかわじょうざん)の詩が描かれていました。当時の作品は細字が内側に描かれたものばかりですね。

秋元: 現在では田村さんが外側にも細字を描いていらっしゃいますが、昔は全部内側だったのですね。

田村: 初めは内側から出発したんです。しかしながら初期の作品は湯呑の中に細かな文字が描いてあるというだけで、いわゆる書の美しさと呼べるようなものではなく、完成度が大変低いものでした。そんななか、明治27年頃、私の曽祖父であり初代・小田清山が独自の工夫により、百人一首など日本古来の歌を題材にかな書きで表現することで毛筆細字技法を完成させました。



秋元: それまでも細字的な装飾は存在したものの、かな文字で表現をしたのは初代が初めてだったということですね。

田村: そうですね。それに加えて、祖父は文字の正確さや美しさにこだわりました。ただ描いてあれば良いということではなく、漢字やかなの「字の良さ」を伝えるものを描いて評価を得たのです。

秋元: 「なんとなく文字になっている」のではなく、書としての美しさや技術を追求されたのですね。初めの頃の作品はどういったものが多かったのでしょうか?

田村: 番茶器や湯呑などがほとんどでした。

秋元: なるほど、日常使いのものだったのですね。



田村金星作。二代は初代による細字の技術をベースに、さらに表現を発展させた。

田村: こちらは私の祖父で二代目にあたる田村金星(※)の作品です。

(※)田村金星/明治29年(1896年)、石川県白山市(旧松任市)に生まれる。独自の細字技法を確立した小田 清山に師事し、その技を引き継ぎながら、さらに精妙な表現技術に発展させる。石川県指定無形文化財保持団 体である九谷焼技術保存会会員として、九谷焼の独自の技術であるとされる細字の技を守り伝えた。

秋元: この作品のように、外側にも文字を描いてみたり、漢字だけでなくひらがなを使ってみたり、漢詩からかな詩に 挑戦してみたりと、徐々に技法を洗練していったのですね。

田村: 初めの頃は、ある種の好奇心というか、手に取った人を驚かせるような技術として始まったんですね。それがだんだん技術力をアップしながら完成度を増して、最終的には誰が見ても「すごい」と言うような技術の限界に挑むところにまで発展していきました。明治の後半から大正時代にかけては、九谷の金襴手も大変精巧で、細字と組み合わせた色彩的にも素晴らしい作品もたくさん生まれています。



田村: こちらは初代の作品です。だいたい80~90年前のもので、内側には百人一首、外側にはカルタ割で絵付けが施されています。

秋元: すごく華やかだなあ。本当に繊細な、量産できない仕事ですよね。

田村: それから、こちらは私の祖父である二代・田村金星が作った60年ほど前の湯呑なんですけど、ちょっと珍しくて、「奥の細道」の句だけじゃなくてストーリーが全部描いてあるんです。





秋元: これはすごい!

田村: このあたりの作品になると、字の良さというものが分かっていただけるのではないかと。この頃も、絵付けは金沢の職人によるものですね。

秋元: 二代目までは問屋さんなどから注文を受けて作品を作っていたのでしょうか?

田村: そうですね、明治時代は産地問屋さんの仲介や、金沢や小松にある九谷焼のお店からの発注でこういったもの

を作っていたようです。

秋 元: 例えばこの作品の場合は「奥の細道をテーマにしたものを」というような感じで注文を受けていたのでしょうか?

田村: 祖父自身、文学的なものを作りたいという気持ちがあったようです。その頃、北出塔次郎先生と出会い、多様な作品の作り方ですとか、文学的な表現の織り交ぜ方ですとかをアドバイスしていただいたんですね。例えば面白い作品で、樋口一葉の「たけくらべ」を描いてほしいと依頼されたものがあります。外の絵付けは北出先生がされたんですね。それが一つのきっかけとなって、作家的な芸術性を含んだ作品作りへと向かっていったわけです。



田村: 初代は篆書体(てんしょたい)や楷書体などを用いて、文字を装飾として発展させました。次に祖父が日本文学的な世界に踏み込んで、他の装飾との一体感をさらに持たせていきました。作品から推測するに、日本的な感性の焼き物を作りたいといった考えで活動をしていたのだと思います。

秋元: 初代は習字か何かを習っていたのでしょうか?

田村: 初めは独学だったのですが60歳になってからようやく書家について、改めて勉強したそうです。

秋元: 仕事の中では割と後期になってから細字を始めたのでしょうか。細字に特化していくようになるのは、60代に入ってからということですね。

田村: それまでも細字を描いていましたが、ある時に京都のスポンサーから「本格的に書を勉強してみてはどうか」と 言われ、金銭面での支援を受けて、美しい文字を描けるよう勉強をしました。こちらは珍しい作品で、赤で細字 が描かれたものになります。



秋元: おお、これは珍しいですね。

田村: 細字の作品の9割が黒字で描かれているのですが、赤字もあるというのは、一つのレパートリーとして作ったのではないかと思います。昔から黒字が多い理由は、やはり金襴手や細描との相性が良いということなんでしょうね。

秋元: デザイン的な理由ということですね。それにしても相当細かい仕事だなあ。二代は素地もご自身で作っていたのでしょうか?

田村: 祖父は窯屋さんに自分のイメージする形を依頼していました。専属の絵付け職人さんがおりまして、祖父は文字を描き、自分の理想の絵を職人さんに描いてもらっていたという。ある工程だけに専念するのではなく全体のデザインを考えて一つの作品を作るというのは、やはり北出先生との出会いが大きかったようです。

秋元: 二代の頃も、形状としては湯呑や番茶器が多かったのですね。

田村: そうですね。それが昭和10年あたりを過ぎてから花器や香炉なども登場するようになります。香炉の形状は細字と相性が良く、私自身も香炉を一番得意としています。



田村敬星作「万葉集彩色八角香炉」

秋元: なるほど。花器のような大きな作品に展開していくのは最近になってからなのですね。それ以前は手のひらに 収まるようなサイズで世界観を表していた。それが田村さんの代になって、ある程度の大きさも必要になってく るでしょうし、文字以外の部分も含めた全体として作品を作っていくようになられたということでしょうか。

田村: はい。仕事の人生設計と言いますか、50歳までは色絵だけでも作品としてそれなりに評価できるものを作りたいと思っていたのですが、50代に入ってからようやく、自分だけが持つ技法として細字を中心とした作品に取り組むようになりました。

秋元: 田村さんはどのような経緯でこの世界に入ったのですか?

田村: 祖父から後継者になってほしいと言われたこと、また九谷焼業界や産地問屋さんたちからの勧めもあり、19歳でこの道に入りました。今から約50年前ですので、当時祖父は72歳ぐらい。正直なところ祖母も私の両親も心配して反対されたのですが、祖父からのものすごい希望がありまして。



秋元: おじいさんの強い要望があったのですね。田村さんは現在72歳になられるとのことですが、初めの頃は高度経済成長期だったということもあり、今と生産方法が違っただろうと思います。例えば量産的なことをすることもあったのでしょうか。

田村: 一切なかったですね。昔から一人でできるだけの数しか作っていません。ですので景気が良い時期も、ほとんど 自分には関係がありませんでした笑。

秋元: 工房のように職人を抱えるということは全然しなかったということですか?

田村: はい。私の場合は娘の星都(せいと)が唯一の弟子になるんです。歴代ずっと一子相伝で、一族のなかで最もこの仕事に適した人物が継いでいる形です。ですので家族以外の方で、この仕事を志して門を叩いた人は誰もいません。この仕事は自分自身の生活を成り立たせるのも一苦労なので、それを考えますと、なかなか他の方に教えるというようなところまでできないんですね。もう一つは数も作りませんし、全ての作業を一人で行っているので手伝っていただく仕事がないのです。

秋元: なるほど、田村さんは絵付けまで全て自分で行っていらっしゃるので、お弟子さんにお願いする下仕事のようなものがないということですね。

田村: そうですね。あとは私自身の性格ですが、せっかく自分で文字を描いたものを、他の方に絵付けしてもらいたくないんです笑。ただ、自分一人で続けてきたことが果たして良かったのかどうか。やはり疑問に感じたこともあります。



四代・田村星都さんは大学卒業後に修業に入り、平成19年(2007年)石川県立九谷焼技術研修所実習科修了後、石川県小松市に工房を構えた。画像は「萬葉集和歌赤絵陶匣」。

秋元: 最近では星都さんの活躍もあって、細字の魅力がどんどん知られるようになってきていますね。

田村: 近年は釉薬にしても色々な材料が手に入るようになって、ずいぶんと作りやすくなっていますし、窯にしましても 昔は薪窯だったのが現在は電気窯など自動で温度が調整できるようになっているので、かなり技術的にも作業しやすくなりましたね。



田村: それでは、実際に細字を描いていきます。



秋元: 細字用の釉薬は相当粘り気があるのですね。

田村: これはマンガンを主体とした釉薬なのですが、釉薬の調合と筆作りが大変重要なんです。自分の手に馴染む筆を作れるようになれば、美しい文字を早く描けるようになります。



田村さんの仕事机の上には必要最低限の道具のみが置かれている。

秋元: ずいぶんと筆がたくさんありますね。こちらは使い分けているのでしょうか?

田村: 筆はたぬきの毛で作られているのですが、消耗が激しいので一本で20首ほどしか描けないんです。ですので何本も用意しておいて、使い分けながら文字を描いています。筆は初代の頃からずっと同じ京都にある筆屋さんから仕入れていて、自分で調整して使っています。



流れるような速さで筆を進め、あっというまに一句を描き終える。

田村: 分かりづらいのですが、細字技法の一つのセオリーとして縦の線は下から上に引っ張ってきます。通常の文字の描き方とは全く違うんですね。

秋元: 思ったよりかなりスピードが早いですね!その太さの筆で、よくここまで細かく描けるなあ。

田村: 指先には本当に微かな力しか、かかっていません。筆の先端を少し切ってありまして、その角度によって線を太くしたり細くしたりしています。

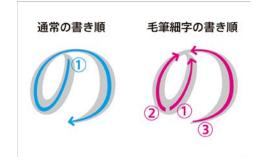
秋元: 描き進めるにつれてどんどん下がっていきますが、湯呑などの内側に描く場合は、当然奥の方が描きづらくなりますよね?

田村: そうですね。奥に行けばいくほど筆が立っていきます。一度、「千早ぶる 神代もきかず 龍田川 からくれなゐに 水くくるとは」と描いてみましょうか。



秋元: やっぱり書き順が違うので途中まで全くわからないなあ笑。本当に細かい仕事ですね。

田村: 湯呑みの内側に文字を描く場合、上の方はそうでもありませんが、奥の方へ行けば行くほど、縦の線を上から下へ引くよりも下から上へ引いたほうが合理的に描きやすいんです。これを初代が一字一字、書き順から考えまして。外側に描く際も全く同じ書き順です。ですので初代から四代の星都まで、書体は自然と似ていますね。

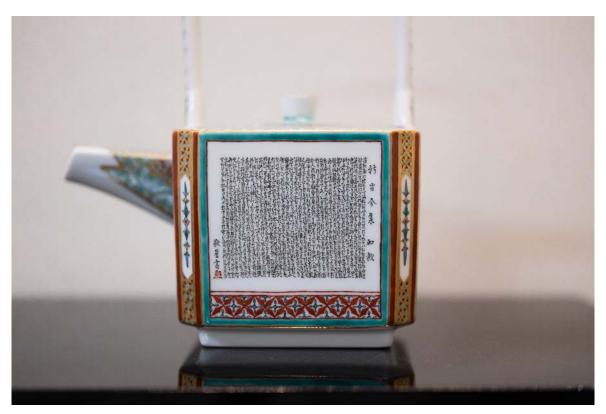


秋元: 想像していた以上に複雑だなあ。本来の書き順ではない 独自の方法で書の美しさを極めるというのは相当難しい ことだと思います。

田村: 付け加えますと、墨汁ではなく釉薬を使うので線が伸びないんですね。ですので一字、二字描いては釉薬を付けてということを繰り返しています。

秋元: それを立体物に描くとなれば、かなり大変ですよね。ものすごい集中力も必要となるのではないでしょうか。

田村: そうですね。そこはもう雑念を捨てるというか笑、本当に描くことだけに集中しています。最近はどちらかと言いますと、何か面白くないことがあったときに筆を持つと落ち着くということもあります。



田村敬星作「新古今集手付銚子」

田村: もう一つ工夫していることと言いますと、例えば百人一首を描く場合、文字と文字との間に余白が生まれてしまっては美しくないので、隣り合う文字のバランスを見て、文字の大きさを調整しながらパズルのように埋めていくんです。最終的に文字を描き終えたときに、それが文様のようにまとまって見えるよう仕上げています。

秋元: 一文字ずつの美しさというのはもちろん、全体としても文字が整然として綺麗に見えるよう配置を工夫しているということですね。一日にどれくらい作業をしていらっしゃるのですか?

田村: 文字を描くのは午前中の明るい時間帯なのですが、一時間にせいぜい5首ほどしか描けませんので、そんなに多く描くことはできないですね。午後はデザインや色絵、次に描く詩の選別などを行っています。ですので私の場合は本当に作品の数が少ないんです笑。



田村敬星作「百人一首八角香合」

秋元: 色々お話を伺っていますと、改めて技法を習得するまでにかなりの訓練が必要な世界だと思うのですが、やはり修業は厳しかったのでしょうか。

田村: 祖父から仕事を継いでくれと言われたとき、不思議と自分ができないとは思わなかったんですね。祖父ができるのなら自分にもできるだろうと笑。そのように思えたということは、やはり自分に与えられた仕事だったのかなと今になっては思います。今でも苦しいと思うことはありますが、それでも辞めたいと思ったことはありませんでした。自分にしかできない仕事をやりたいという一心で、どんなに苦しい時期も筆を置くようなことは決してありませんでしたね。

秋元: この世界に入られるまでは何をしていらしたのですか?

田村: 高校卒業後、大学に進学する予定が受験に失敗しまして。浪人して予備校に通っていたときに、祖父から「普通の勤め人になるより、じいちゃんの後を継がないか?」と言われたんです。進路は教育系を考えていたのですが、私は子どもの頃からものづくりに興味があって、心の中でそういう仕事をしてみたいという気持ちもありました。そこで祖父のもとへ行く決心をするのですが、一ヶ月間、適性試験のようなものがあって笑。祖父が描いた書のお手本を毎日50枚ほど写し描きしていくんです。結果、祖父が「なんとかできそうだ」と判断して、翌年から本格的に修業に入りました。そしたら修行が大変厳しくて笑。

秋元: やっぱり厳しかったんですね笑。

田村: 考えてみましたら、当時、祖父は72歳だったので「早く一人前になってほしい」と必死だったんですね。私も早く 一人前になって自分のものを作りたいと思っていました。



毛筆細字技法は、視力も欠かせない道具の一つ。

秋元: おじいさんの代は、どういったお店に作品を納めていたのでしょうか?

田村: 今は無くなってしまいましたが加賀市山中温泉にあった九谷焼を扱う大きなお店や、金沢では諸江屋さん、兼 六園そばの片岡光山堂さんなどで取り扱っていただいていました。

秋元: なるほど、昔の取扱店はほとんどが地元だったのですね。

田村: そうですね。産地問屋は大手の問屋が多かったです。祖父の頃は大変人気があって、連日のように産地問屋の ご主人や若い方が2、3人やって来て、朝から晩まで作品が出来上がるのを待ってるということもありました笑。



秋元: 毛筆細字技法は他の焼き物の産地にもある技法なのでしょうか。

田村: ないと思います。焼き物で、ここまで細かい文字を描いているものは見たことがありませんね。年2、3回、全国各地で個展を行っていますが、ほとんどの方は九谷焼の細字技法を知らないですし、初代や二代の作品をお持ちの方も北陸3県以外ではほとんどいらっしゃらないんです。

秋元: 娘の星都さんはどのようなきっかけで後を継がれること になったのですか?

田村: ある日突然、娘から「細字をやってみたい」と言われまして。驚きましたし嬉しかったですが、大変厳しい世界なので正直少し悩みましたね。でも、ここで娘の申し出を断ったらこの技術は途絶えてしまうと考え、思い切って教えてみることにしたんです。我が家には代々「マラソンラン

ナーではなく駅伝ランナーであれ」という教えがありまして。一人でゴールを目指すのではなく、それぞれが自分の代でできる限り良い作品を作って、それを次の代につないでいこうという考えのもと、取り組むことにしました。

秋元: 星都さんへの指導はどのようになさったのでしょうか。

田村: 最初の3年間は細字を教えませんでした。というのは、私は細字を先に習い後から焼き物を学んだので、もっと焼き物の勉強をすればよかったという反省があるからです。私はというと、娘が一人前になってくれたおかげで自分の仕事に専念することができるようになりました。作家として別々の仕事をしていますが、二人でできるようになってからようやく足が地についたように、自分の作りたいものに取り組めるようになりましたね。



この回のまとめ

何気なく見ているものの中にも様々な苦労があり、努力があるということを今更ながら知る取材となった。しかしそれは田村敬星さんの仕事に苦労の跡が見えるということではなく、あまりにもすんなりと破綻なく細字が描かれている、その当たり前に驚いた。作品を観ていると、知らずしらずのうちにこちらの鑑賞レベルが上がっているというのは、いい仕事を見ることの効用ともいえるものだが、田村さんの仕事はそういう仕事である。九谷の特性の一つである「技術力」の底力を感じることができた。娘である星都さんが後を継ぎ、細字の魅力を若い層にも伝える機会が増えて、新たなファンが増えるのが楽しみである。



九谷焼の芸術祭 **KUTANism**

主催:クタニズム実行委員会 共催:小松市、能美市 協力:石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、 九谷団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援:北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局

〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地(小松市役所観光文化課内) Tel: 0761-24-8130 Mail: info@kutanism.com



クタニズム